

会議録（概要）

会議名等	第2回 四街道市子ども読書活動推進計画策定委員会		
年月日	令和8年2月3日（火）	時間	14:00～16:00
場所	四街道市役所第二庁舎第2会議室		
出席者	委員 村上会長 渡辺副会長 林委員 谷嶋委員 水野委員 秋山委員 大塚委員 山田委員 下山委員 齋藤委員 水口委員 平田委員 堀委員 事務局 伊藤指導課長 田村指導主事 猪谷指導主事		
欠席者	0人		
傍聴人	0人		
委嘱状交付 —— 会議次第 —— 1 開会 2 会長挨拶 3 議題 議題1 第四次計画における成果と課題について（「読書に関するアンケート」の結果を踏まえて） 議題2 第五次計画の基本方針、具体的な方策等について 議題3 策定スケジュールについて 4 諸連絡 5 閉会 —— 会議要旨 —— 1～2 会議次第に従い進行 伊藤課長 3 議題 （議題1）第四次計画における成果と課題について（「読書に関するアンケート」の結果を踏まえて） 事務局：以下の点について訂正をお願いする。 ①「資料2」P2「1目標とする数値について」 「（1）図書館・公民館における児童書貸出冊数」 「令和元年度末10,2033冊」を、カンマの位置を右に1桁ずらし、 「令和元年度末102,033冊」とする。 ②「資料2」P4「3課題」冒頭文について、 「学年が上がるにつれて読書離れが増えていく傾向については第一次計画策定時からの課題となっており、第五次計画策定のために実施した読書に関するアンケートの結果においても、」とあるが、「学年が上がるにつれて読書離れが増えていく傾向については第一次計画策定時からの課題となつて <u>いますが</u> 、第五次計画策定のために実施した読書に関するアンケートの結果において <u>も</u> 、」とする。			

渡辺副会長：不読率が上がっていることが残念である。県では減少傾向にある中、本市が増加してしまったことは厳粛に受け止める必要がある。

（国の第五次計画概要版を提示）

国では、不読率について継続して調査をしている。中高生の不読率が大きく下がっているところは、中学、高校で朝読書が始まった年である。

国でも不読率の低減は重視している。本市では、まず不読率の低減を考えていく必要がある。本市の不読率が上がってしまった原因としては、司書教諭がきちんと機能していないことが考えられる。学校司書だけでなく、司書教諭や学校図書館担当がチームとして取り組むことが求められる。さらに、管理職の協力も得ながら、学校全体に働きかけていく必要がある。

ブックリストによる啓発も重要であるが、図書館や学校図書館にブックリストコーナーはあるだろうか。書店にも働きかける等、ブックリストコーナーの設置も促進すべきである。

読み聞かせは読む力にはつながらない。ビブリオバトル等、読み聞かせの次の段階の活動を位置づける必要がある。

大学生に聞いてみると、電子書籍では物語は読みづらいようである。小中学校でも一人一台のタブレットが配付されていると思うが、「物語を読む」よりも「調べ学習」への活用が効果的である。

アンケートを見ると、子どもたちから良い意見がたくさん出ているので、先生方にも伝える等、各学校で共有して授業等に活かすとよい。

漫画でも、タンタンのシリーズ等、読書力のつくものもある。今年の大学入学共通テストでは、「ベルサイユのばら」の1コマが使用された。良質な漫画から世界史や古典等に興味や関心を持つこともある。漫画を充実させることで、学校図書館を訪れる子どもも増えるのではないか。

村上会長：「読書に関するアンケート」の結果を踏まえて、各委員の立場から現状や成果と課題について発言はあるか。

谷嶋委員：本校の生徒の多くは本が好きである。それは幼少期の読み聞かせ等の成果であると思うが、では借りるかという、なかなかじっくりと読むことのできる時間が足りないという現状がある。

しかし、今は忙しくて読めないという生徒も、将来的に本に戻ってくる生徒は多いであろう。どこに目標を定めるのか。

ペルシャ語の本が欲しいという生徒もいる。

林 委員：司書教諭としての自覚があるが、学校図書館のことは学校司書に任せてしまっている現状がある。担任をしながらの毎日であると、手が回らない現状もある。私自身、本も好きであるが、なかなか読む時間を取ることもできない。アンケートの子どもからの意見にある「放課後も図書室を開けてほしい。」という意見はとても良いが、放課後にもさまざまな活動があり、実現することは難しい現状がある。

「週に1回は学校図書館で授業をしてほしい。」という意見について、本校では低学年はそうにしているが、3年生以上では、教職員に呼びかけてもなかなか難しい様子である。

渡辺副会長：司書教諭の役割は、オリエンテーションの調整をすること等である。

学校図書館にはなかなか行けない現状も理解できる。

また、管理職の後押しも必要である。

社会科の授業を学校図書館で行い、その際に本を借りるという方法等、学校図書館の利用と授業の関連について、司書教諭が積極的に関与できるとよい。

山田委員：たくさん本は借りていないが、本が好きな子どももいる。また、本を借りていても、本当に読んでいるのか疑問に感じる子どももいる。

担任ではないと、子ども一人一人の読む力については把握することが難しい。また、担任の先生とゆっくり話すことも難しい。

子どもたちに助言したいので、先生方と協力して取り組みたい。

水野委員：ブックリストの認知度が低いことに驚いた。何か具体的な対策を考える必要がある。保護者からも、どの本を選んでよいか分からないという声をよく聞く。幼児期の保護者もどのような本がよいのか悩んでいる。どのように保護者に本を紹介したらよいかも課題である。

市内幼稚園は私立であり、園によって読書活動に対する考え方が異なる。市内幼稚園の図書に関する研修会で、園による違いに驚いた。

読み聞かせは本を好きになるための土台作りであると信じており、ブックリストの周知が重要である。

齋藤委員：現在、来館するのは本が好きな人が中心であるが、毎週のように来館する近隣の保育園もある。毎回本を借りることで、本を選ぶスピードが速くなっている様子も見られる。本を好きな人だけが本を読むのではなく、本を好きになる環境づくりを大人が積極的に行う必要があると感じる。

下山委員：国の計画でも読み聞かせを重視しているが、未就園児にも対象となる子どもが相当数いると考えられるため、そのケアも考える必要がある。

健診時等でブックリストを周知する機会を設ける方法もある。

ブックリストはどのように作成されたか、伺う。

事務局：ブックリストは図書館担当、学校司書、司書教諭、市立図書館司書で作成した。

学校を通じて周知したつもりであったが、現状を受け止め、対応策を検討する。

また、市内小中学校におけるブックリストに掲載のある本の蔵書状況を調査した。

半数の学校でブックリストの全てが蔵書されており、残りの半数は数冊の欠品がある状況である。

秋山委員：0歳から5歳までの子どもがおり、担任が発達段階に応じた本を選び読み聞かせを行っており、子どもたちは読み聞かせを喜んでいる。繰り返し読み聞かせることで言葉を学び、徐々に自分で読むことができるようになってきている。

また、子どもが自由に本を手にとることができるよう配慮する等、本が好きになるような環境づくりに努めている。

市立図書館と団体貸出を利用するなど連携しており、その中から家庭に借りる子どももいる。また、コーナーを設ける等、さまざまな本に触れる機会を提供している。保護者への働きかけも模索しているところであるが、市立図書館との連携は大切である。

大塚委員：各校でボランティアとして読み聞かせを行っているが、子どもたちに読書力が本当に身についているか疑問に感じることがある。

学校司書の立場からも、環境づくりは大切であるが、環境だけでは読むことができるようにはならない。大人が本を読むことができるように導かなければならない。

大人の読書習慣が乏しい現状を踏まえ、家庭での読書を充実させる等、子どもの読書力向上に向けた具体策が必要である。ビブリオバトルも効果がある。

水口委員：子どもからも大人からも「大人が本を読む姿が必要」という意見があり、興味深い。

最近は子どもの学びになるような本を多く読んでいるが、子どもと一緒にファンタジーの世界に浸れるような本を読むことが、より心を豊かにすることもあるかもしれない。本を読む大人の姿を子どもに見せることが大切である。子どもには本を好きになってほしいので、大人が本を読むことの楽しさを伝えていくことができるとよい。数値で示す成果とともに、そういった内容も方針等に入るとよい。

平田委員：今は子どもたちが直感的に楽しめるコンテンツが多く、文字を読んで想像するとい
うところが欠落しているように思う。読み聞かせの次の段階の活動を考える必要がある。
言葉との出会いで心に響く活動が必要であると感じる。

文字を読む力を育てる方策を講じる必要がある。

例えば、「図書通帳」制度などの導入も検討してはどうか。その通帳を子どもが大人
になった時にプレゼントできるような制度があると、なおよい。

学校の宿題に音読があるが、「宿題だから」ではなく、登場人物の会話を想像力を
働かせて読む等を重視できるとよい。

堀委員：特別支援教育支援員として勤務している在籍校では「百選」があり、指定された本
を読むと廊下の掲示物にシールを貼ってもらうことができるともよい。ブックリ
ストもコーナーを設置して勧めてみるとよいのではないかと。

不読率については、定期的な読書タイムが必要であると思うが、市内の全校で行わ
れているのだろうか。読書タイムの取組がない学校もあるように思う。1人1台タ
ブレットを持っている子どもたちは、隙間の時間にタブレットに触れようとする姿
が多く見られ、本を読もうとするような姿はあまり見られない。その様子から、子
どもたちは本当にタブレットが好きなのだと感じた。

アンケートの「7 本を読むことが好きではないのはなぜですか。」の回答「読みたい本
が見つからない。」からも、ブックトークのような本の紹介をすることも必要
であると感じる。読み手の底上げが必要である。

ボランティアの方の横のつながりを作る等、連携を強化することも大切である。研
修会の実施等もあるとよい。

村上会長：皆様から出た意見を成果と課題の中に反映していただきたいと思う。

(議題2) 第五次計画の基本方針、具体的な方策等について

村上会長：事務局からの説明について、何か質問はあるか。

渡辺副会長：子どもたちの意見をアンケートで採っていただいたが、図書委員の活動が活性化
すると学校図書館の貸出率が上がる。各校の図書委員の児童生徒が会議を行う等、図
書委員の活躍が期待される。

新聞の活用も読書に含まれるという視点で内容の中に盛り込んでいただきたい。

各委員：特になし。

事務局：スローガン、基本方針、具体的な方策は事務局からの提案どおりでよいか。

各委員：異議なし。

事務局：いただいた意見は素案作成の際に検討します。

（議題3）策定スケジュールについて

村上市長：事務局からの説明について、何か質問はあるか。

各委員：特になし。

4 諸連絡 事務局

1点目は、第1回策定委員会の議題（1）「第五次計画策定にあたっての協議」の中で、平田委員から質問のあった「相対的貧困状態やヤングケアラーの子ども数がどのくらいか」についての回答である。

関係課に確認したところ、相対的貧困状態については、収入や家族構成など、どの状態を貧困と定義するかによって捉え方が異なるため、数値として明示することは困難であるとのことであった。

なお、この内容に関係する資料として、令和5年12月に実施した「四街道市子どもの生活状況調査」の結果報告書が、市のホームページに掲載されている。後ほどご確認いただきたい。印刷した資料も用意してあるので、必要に応じてご覧いただきたい。

また、ヤングケアラーの数については、関係課において一定数を把握しているものの、すべてを把握しているわけではないため、正確な数値をお伝えすることはできないとのことである。

2点目は、次回の策定委員会についてである。

開催日は、令和8年5月中旬を予定している。会場は、本日と同じ場所である。

内容は、第五次計画の素案についての協議を予定している。期日が近づいた際には、開催案内を送付する。会議資料は、開催日の1週間前に送付する予定である。

また、次回以降も策定委員会の際には、第五次千葉県子どもの読書活動推進計画、資料1「読書に関するアンケート」（結果）について、第四次推進計画の冊子をご持参いただくようお願いする。

5 会議次第に従い進行 伊藤課長